

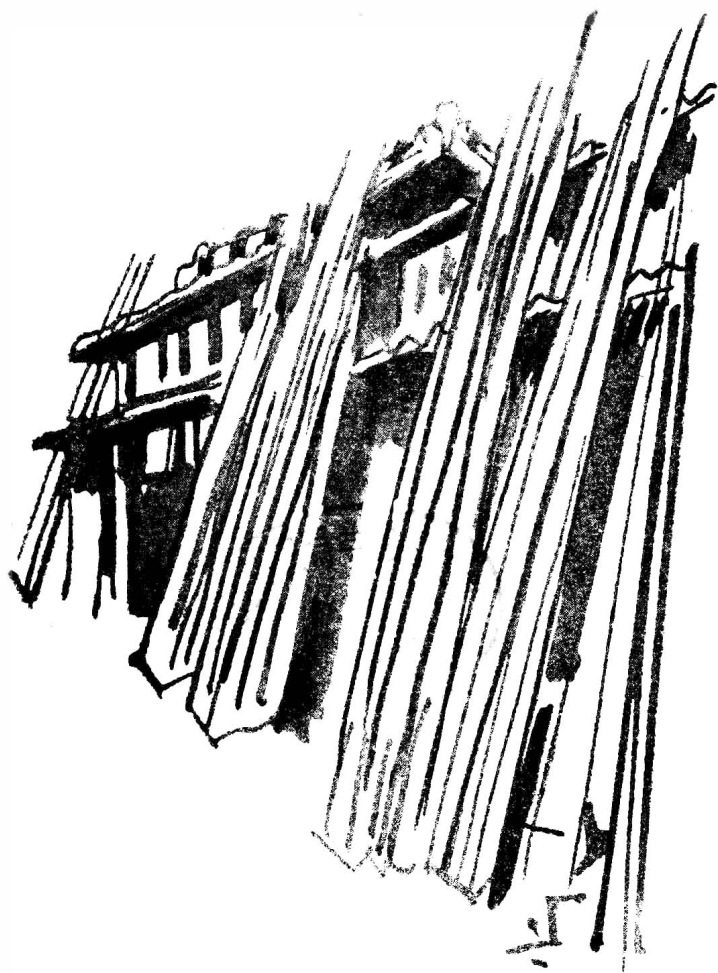
白子屋駒子 下卷

舟橋聖一

白子屋駒子

下卷

舟橋聖一



(全二冊)

昭和36年3月15日 初版発行

白子屋駒子 下 三〇〇円

著 者 舟 橋 聖 一

発 行 者 角 川 源 義

印刷所 中光印刷株式会社

製 本 所 株式会社鈴木製本所

発 行 所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目
振替 東京一九五二〇八番

落丁・乱丁本はお取替へ致します

白子屋駒子 下卷

目次

黒マントウ

七

青公卿

一六

千両箱

二四

化粧の日

三二

六枚屏風

四〇

和蘭騎手

四八

心の重荷

五六

美しすぎる咎

六四

梅雨の前

七二

こころ変り

八〇

曇った鏡

八八

たまゆら

九六

戌の下刻

一〇四

鯉のすがた

一一二

三階燈籠

一二〇

水のほとり

一二八

心のたけ

一三六

懲罰

一四四

おしろい月

一五三

破れ団扇

一六一

潮ざい

一六九

一つ印籠

一七七

五つの鍵

一八五

崩壊

一九三

召捕駕籠

二〇一

おのが罪

二〇九

傷心

二一七

裁く人

二二五

坂東太郎

二三三

断罪

二四一

涅槃図

二四九

装幀

福田豊四郎

白子屋駒子 下卷

黒マントウ

一

早いもので、駒子^{こまこ}が丹後^{たんご}の家にかくまわれてから、半月の余がたち、そして、いつしか月がかわった。

忠八^{ちゅうはち}は、川越^{かわごえ}地方の仕入れの打合せで、しばらく江戸をあけた。

その忠八の歸りがおそい。それで、駒子も苛々^{いらいら}するが、まして心のおちつかないのは、安倍丹後^{あべたんご}だ。

二階の女が氣になつてたまらない。

そういう或る日、目明しの為吉^{ためきち}が、丹後をたずねてきた。

「旦那——やっと、見通しがついてきましたよ」

「そうか。それは何よりだ。実はフランチェスカからも、長文の手紙が参っている。早く御用にしないと、拙

者も甲比丹殿に合わす顔がないのだよ」

「ところがね、その甲比丹の短筒が、思いがけねえ人の手に——」

「え？」

目明しは、話しかけたのを止めて、あたりを見廻し、

「誰もいないンでしようね」

「大丈夫だ」

「二階は？」

「からっぽだ」

「何んだか、ミシリと云ったようで——」

「氣のせいだよ」

為吉は耳へ口を寄せて

「それがさ、白子屋の番頭忠八の手に渡っていたンですよ」

「何ンと云われる」

これには丹後も度肝をぬかれた。

「驚きなさるのも、むりじゃアねえ。わけというのは、こうですよ」

と、目明し為吉の物語るところによれば——。

川越からの歸り、練馬^{ねりま}街道を下ってきた忠八が、突然

四人ほどの覆面者にとりまかれて、危く手籠めにあいかけた。

忠八は松の木を盾にして、防禦につとめるうち、はじめは、木の棒や板ぎれで襲った彼らの一人が、ドスをぬいたので、忠八も最後と思ったか、飛道具を一発ぶっ放した……。

銃口から赤い火を吐き、ドスを抜いた一人が、

「アッ」

と叫んで、ひっくり返ると、これを見て驚いた三人は、一目散に逃げ畢せたという。

「それまでは、ごくありふれた事件なんです、忠八の持っていた飛道具が、旦那——」

為吉は表情を硬くした。

「甲比丹殿が、小鴉のおぎんに盗まれたオランダ製の新型小筒なんですよ」

「うむ」

「どうしてわかったかといやすとね、その覆面の男というなア、板橋の宿場で、年中ごろついている地廻りだが、恐らく誰かにたのまれて、忠八を亡いものにしようという企らみでしょう。ところが、胸板を一発えぐられ

て、みごとな即死をとげていましたが、そこから取り出した小筒の玉が、まぎれもないオランダものとわかったんです」

「して、忠八は御用になったか」

「へい。今朝早く、小石川へ下りてくるところを、御用になりましたが、飛道具は持っていないせん」

「それじゃア小鴉に返したのか」

「そこらが、はっきりしねえんです」

「忠八の申し口は？」

丹後も思わず、汗をにぎった。

「忠八が云いますには、自分は決して、そんなものは持っていないかった。素町人の分際で、雲助の多い街道筋とは申せ、護身用の脇差一本差してはいないと云い張るんですが、何分、一人死んではいるし、たしかに、飛道具を使っているんで、いずれは泥を吐きましようよ」

為吉の話では、吟味に当たっている同心の思わくも、忠八が射ったものに違いないという観点に立っているそうである。

二

その日の夕方。目明しが帰ってからのことである。

「駒子さん。驚かれな。忠八どんは御用になりましたよ」

と、丹後は風呂へ入りに下りてきた駒子に云った。

「え？」

駒子はわが耳を疑る風で。

「今、心易くしている目明しが来て、知らせてくれたんですよ。もっとも、本筋は別にあつて、忠八どんは濡衣らしい」

「まア……くわしく話して下さい」

駒子は両手で胸をおさえた。

丹後は一部始終を物語った。

「それで、川越の歸りがおくられているのですね……毎晩、胸さわぎがすると思ひました」

「公儀では、その短筒を射ったのは、忠八どんと思ひているが、誰かが貸してくれたのか、あの忠八どんが、そんなものを、日頃持っている筈もなし……」

「丹後さま——お願いでございます」

浴衣すがたもなまめかしい駒子は、丹後の前に両手をついた。

「何ンです」

「忠八を助けて下さい」

「と仰有ると」

「あなた以外に、忠八を助けて下さる人はいません。たとえその短筒を射たないにせよ、一旦、お役人にこうとにらまれば、きびしい御吟味の果て、拷問にかけられるのは必定です。忠八は弱い町人。海老責めの、抱き石のと、恐ろしい責め道具を見ただけでも、いつわりの白状をしてしまひましょう。それが又、お役人の望むところ。たしかにあなたの仰有る通り、忠八が飛道具なんぞ持つてゐる筈がありません。お願いでございます——」

駒子は必死だった。

すると丹後は、黙つてそばへすり寄るなり、駒子の肩のへんを抱きしめながら、白いうなじへ、口を当てた。

駒子は身じろぎも出来なかつた。自分も大事な男のために、命がけで助けを乞うているのだから、いくらいやでも、丹後の口が襟足のあたりへ触れるのを、じつと辛抱していなければならぬと思つた……。この程度の代

償なら、ことがことゆえ、彼のするままになる外はないと割切った。

「忠八を助けて下さい。その覆面の相手というのはきつと、加賀長に頼まれたンです。それでなければ、川喜田に――」

と、駒子は叫んだ。彼ら以外に、忠八を襲う者があるとは考えられないのである。

自戒を破った丹後の口付けのおぞましさに、五体を顫わしながらも、駒子はそれを拒めなかった。

三

――駒子はジッと、丹後にみつめられると、ふしぎな戦慄が五体を走って、それが女の官能を誘惑する。

どんな男にも、女にも、こうした魔は、棲んでいる。

「駒子さん。いやでなければ、拙者の願いを叶えて下さい」

「大恩のある丹後さまのお頼み……どんなことでも、わが身で出来ることなれば、お叶えするが道なれど……」

「いや、なにも、恩義の押売りをするのはござらぬ……只々、丹後のせつない望みだ。自戒に自戒を積み重ね、

ゆめにも、禁断の木の実をとるべからずと、おのれに誓って参ったが、ついに堤の切れるが如く、恋の炎に焼けてしまった。こうなれば、あなたの情けによるほかはござらぬのだ。駒子さん、この通りだ」

と云いさま、丹後は三尺ほど、うしろへすさって、両手をつくなり、額を畳にすりつける。

「武士が刀の手前も忘れて、かくの通り、手をついて、お願い申す」

「丹後さま」

「若し、先きのことが心配なら、一度でもよろしい。一度だけでも、どうか、思いをとげさせて下さい」

「……………」

「どうじゃ。応と云って下さい。一度だけなら、許してくれるでしょう。叶いませぬか。只の一度でも、叶いませぬか」

駒子は苦しくなった。全身に、男の圧力が迫ってくる。それに、圧倒されるばかりだ。然し、ほんとうに一度だけなのか。そういうことは、云うべくして行われぬのではないか。この烈しい男の熱情が、一度や二度で、おさまる筈がないと思う。

「丹後さま。せっかくのお志ではあるけれど、やっぱり私は……」

「……………」

「このまま、ソツとしておいて下さい」

「すりゃ、これほどまでに、頼んでも……」

「はい——」

駒子は、瞑目し、首をまっ直に、身じろぎもしなかった。これ以上、女はわが身をまもれない。人事をつくして天命を待つしかない——。あたかも、死の観念をきめた者が、首の座へ直るように。

四

危機一髪というところで、梯子段をのぼってくる人の足音がした。丹後はギョッとして振返った。

髪は島田だが、黒のびろうどのマントウを引っかけた小鶯のおぎんだった。

「何者だ」

「鳥渡、お邪魔に上ってきました」

「お、その手にもっているのは？」

「これは、その画像のフランチェスカから盗んだ小筒

さ——動くと、射つよ」

「うぬ——」

「丹後さんが、フランチェスカに頼まれて、私の行方を追っているのは、とくに承知さ。丹後さん。あなたも見かけよりは、だらしない男じゃないか。白子屋の番頭から責任もって預ったお嬢さんを、悪口説きするなんて……可哀そうに、お嬢さんは、蛇にみこまれた蛙のように、身じろぎさえ出来ない様子……忠八さんが、女たらしか、そうでないかは、この小鶯が知っているよ……丹後さん、サア駒子さんをはなしてお上げよ」

「こいつ……」

丹後は齒がみするけれど、すぐ目の前に、最新型舶来の短筒が筒口を向けているのでは、どうすることも出来ない。おぎんはそばへやってきて、筒口を丹後の心臓部位にぴたりくつつけた。

「サア、おとなしくおし。おとなしくすれば、射つとは云わないよ。お嬢さん。この間に、この家を出ていらっしやい。門の前に、駕籠を一挺、あつらえておいたから、それに乗って、一先ず、お店へお帰りなさいまし。そりゃアア、大恩のある丹後さんではあるけれど、忠八と

云うきまった男のある駒子さんは、鉄砲洲を去るのが当然。店へ戻ったあとのことは、またそのときのことにして……一時も早く、お逃げなさい」

と、彼女はすすめる。その間も、筒口は丹後の胸をゴリゴリこすっている。

「……どなたかは知らないが、親切なお女中衆……お言葉通り、この場から……」

駒子は着くずれた裾前や棲下^{つま}を直して、丹後のほうへは見むきもせず、

「姐さん、ありがとう」

と、言葉を残して、夢中で、梯子段を下りてゆく。まさに九死に一生を得て、虎口を脱するかの如くだ。

「いや、拙者からお礼を云おう。その短筒のおかげで、白子屋駒子を取逃がしたは、無念に似て無念でない。云わば、お身がわが煩惱^{ぼんぷ}を断^きってくれたも同様さ。わが家の二階へ、物云う花をいけておけばこそ心猿意馬^{しんえんいば}じゃ。それにしても、忠八が所持したというフランチェスカスの短筒が、どうしてここに——」

「そんな詮索は、いずれ後日にわかること……それより丹後さん。今日のことは、悪く思わないで下さいよ。そ

うして、今まで通り、駒子忠八のいい味方になってやって下さいよ」

「それより早く、その短筒を引きなさい」

「もうちいっとの辛抱ですよ。駒子に乗せた辻褄籠^{つじずみかご}が、せめて京橋を渡るまでは——」

「何アに、逃げてゆく女の、あとを悪追^{あくお}いする丹後じゃない」

「そんなら、引きますよ」

小鴉はそういつて、手を引くと、そのまま内ぶところへ、小筒をしまった。然し、いつでも出して射つ氣がまだで、一分の油断もなかった。

丹後はどっかと坐って、汗を拭いた。

「安倍丹後、一代の不覚だが、飛道具には敵わねえ。しかも甲比丹殿^{カビタノ}の似顔の前では、恐れ入ったよ……アーメン」

異人の像にむかって、丹後は大きく十字を切った。

五

鉄砲所持については、享保年間には、きびしい御法度^{ごはつど}が出ている。

その一例二例を出してみると、左の如くだ――。

○江戸より十里四方は、獵師たりといふとも、一切鉄炮、取上げ申すべきこと。

但し、猪、鹿、狼等多く出で、田畑を荒し、人馬へかかり、百姓難儀に及び候節は、鉄炮改め役へ相伺ひ、差図を請ふべく候こと

また、

○一 遠島

名主 安右衛門

右の者儀、御法度の鉄炮所持致し、猪鹿を打ち候段、不届につき、遠島仰付――。

また、

○一 過料

組頭 伝之丞

右の者儀、四、五年以前まで、鉄炮所持いたし、猪鹿を打ち、その後質入れ、或ひは売払ひ候段、不届につき、過料五貫文――。

等の書付が残っていると見ても、町人百姓はもとより、武家に対しても、飛道具の所持は、相当きびしい取締りがあったことが明らかである。まして女性にお

いてをやだ。鉄炮改め役は、一村に何挺の鉄炮があるかを、絶えず調べていて、鹿猪おどしに使うときは、玉を込めないようにという注意までしているのを見ても、当局の取締りは、玉一発の仔細にまで及んでいたのである。それをおぎんのように、オランダの甲比丹から、枕さがして奪った最新型の小筒を、いざというときは、ふりまわして、捕物から逃れるという放れ業を演じているのだから、江戸町奉行をはじめ、与力同心、岡っ引の末々に到るまで、躍起となって、

「小鴉逮捕」

を目標に、あせりぬいているのが現状なのである。が、おぎんはそれを尻目に、今日も突然鉄砲洲の家にあらわれ、当の丹後をフランチェスカスの画像の下に、三十分あまりも釘付けにすることに成功したのである。

そしてまた、黒マントウをかけ直すと、おぎんは、悠悠として、この浪宅を去った。

玄関の柱には若党勘六が、おぎんの持っていた麻縄で縛りつけられていた。この鋭利な飛道具一つで、おぎんはまさに、無人の野を行くのであった。

六

丁度その頃、白子屋の店は、大へんな騒ぎだった。

と云うのが、今朝、店をあける匆々、ドヤドヤと、十五人あまりの岡っ引がやってきて、番頭忠八の部屋を、家捜しはじめたからである。

お常をはじめ、番頭手代は、家捜しの間中、みな、一か所へ押しこめられ、只茫然として、彼らのするにまかせた。岡っ引共は、このときとばかり、乱暴に押入や戸棚、抽斗のすべてを洗った。はじめは忠八の部屋だけに限ったが、目星しい獲物がないせいか、帖場から、蔵の中まで、調べ出す。

「清兵衛さん。困ったなア」

と、まっ青になっているのは、小僧の甚吉である。

「どうしたんだね」

「あっちの抽斗には、手紙がどっさり入っているんだ」

「何んの手紙だね」

「おいち坊からの恋の文だよ」

「揩きやアがれ——」

そうかと思うと、売掛け金をごまかしたのが、この際

バレて、明るみへ出はせぬかと、ひとりで氣をもんでいる手代もある。

家捜しが、それでも一ツ刻半ほどかかって、すむと、頭だった与力の一人が、

「当家番頭忠八と申す者、練馬宿の外れで、人殺しの罪を犯し、小石川まで逃げたが、そこで御用に相成った。よって、勤先の白子屋を家捜しした。証拠書類少々、押収するから、そう思え——」

と申渡して、引上げた。

駒子がおぎんの誂えた駕籠で、白子屋の店先へ戻ったのは、それから又、一刻ほどあとだった。

「ヤア、お嬢さまが……」

「お歸りだ。お歸りだ」

家捜しに度ぎもを抜かれていた手代や小僧が、駒子の帰宅で、生き返ったように、店先へ飛び出してきた。

お常もおひさもそれと聞いて、走り出る。

「あゝ、駒子や」

お常はさすがに、血をわけた娘の無事に、駒子の肩にしがみついて、涙を流した。

「よかった。よかった。さぞ、苦勞もしただろうが、く